

## LIVE: THE STREET BEATS 1993.7.25 川崎奇アデブ、キック

この日、はじめてライブで演奏するという「WAITING FOR THE SUN」という新しい歌をきいた。暗闇はいつかかならずおわるという内容。歌詞をただ言葉だけのレパルでとらえたら、文字にしただけなら、多分それほど詩を感じさせないだろうと思う。この歌だけでなく、OKIの最近の歌詞は、文字としての言葉そのものの衝撃力がはうずけている。しかし、歌詞というは文字として読まれることを前提にしたものではなく、歌われて生命をもつものであるから、言葉の強さや弱さで考えることはできない。一見わかりやすくやさしい歌詞がOKIに歌われると、衝撃力をもって迫ってくる。

生きつづけていくということは、闇がどんどん深くくなっていくことである。だからこそ光もそれだけ強くくなっていくことである。「暗闇はいつかはあかる 太陽が昇っている」と歌って、それだけ闇の深さを、光の強さを感じさせるのが歌の力。きく方は、それぞれの度合いで、その歌を自分の歌としてまく。広島の桑田忠雄くんが「曲は成長する」と書いてくれたけれど(70号参照)、曲が成長するっていうことは、実はOKIが成長するということであるし、桑田くんが成長するということなのである。それと最近のライブでいつも心にひびいてくる「ブルー・ヘブン」という歌。この歌は、文字におこしてみたら、多分それだけでも詩になっているかもしれない。それはもちろん、演奏をとまらなくて歌として歌われるのとはちがったものではあるが、生き方を考えさせるのではなく、生命そのもののほかなさ、あやうさを感じさせる。OKIがこの歌を書いたのが10代のおわりだったということでもいえるが、こういうほかなさやあやうさは10代の貞に強く感受されるものだろうけれど、いまOKIがこれを歌うのは、ほかなさやあやうさを 現在も感じているからにほかならない。10代につくった「ブルー・ヘブン」と、いちばん新しい「WAITING FOR THE SUN」が、いまともに ききごたえがあるということは、10代の純粋性を失なうことなく生きつづけていけること、どんなに深い闇につつまれても光を求めて生きつづけていけることの証しである。

だからストリート・ビーツは10代のファンだけでなく、20代以上のファンも大勢いるのだ。この日のライブでOKIは「ビーツのお客さんは、受け入れ方が柔軟で感謝してます」といったけれど、それはストリート・ビーツにそれだけのものがあるからなのだ。

## CD: VAI "SEX & RELIGION"



このアルバムにはスピリチュアルな世界を歌った曲、宗教につながるような内容の歌が多いが、これはSVが「ブラック・ホールから追い出した」きっかけがそうしたものだったこと、以来そうしたものを探究し続けていることと関係がある。SVとの今回のインタビューでもそういう話を中心にしたが、印象に残ったのは、彼が求めているスピリチュアルな境地と、ミュージシャンとしての名声、地位、富など世俗的な意味での成功が往々にして衝突し、彼の中で大きな葛藤が生まれるという話だった。「そういうことで悩み、煩悩することが貴方をより人間的にするのではないか」という私の意見には「僕にとって人間的であるということとは愛そのものであることを意味する。エゴ(SVは名声、etcをエゴの反映と考えている)は自己愛であり、僕が求めるものとは相容れない」という返事が返ってきた。

上のコピーはVAIのCD「SEX & RELIGION」のライター・エッセイ。書き手は林洋子。文中のSVというのはスティーヴ・ヴァイのこと。この文にあるようにスティーヴ・ヴァイとヴァイとヴァイの重複にちがう個性の衝突があるせいか、すくなくはいろいろなアルバムではない、おちついてとりまないと、その良玉、まばらさが伝わってこないような気がする。

## MOVIE: 「レニングラード・カウボーイズ・ゴー・アメリカ」



「レニングラード・カウボーイズ」は、とある国のツンドラ地帯を拠点に活動するサエないバンドである。彼等は、これ見よがしのすまじいリーゼント・ヘアーにサングラス、世界で最も尖った靴、そして毛皮のコートといったスタイルである。夜を徹して屋外でリハーサルをしていたところ、メンバーのベース担当が凍結してしまい、困惑していた。

彼等はバンドとして筆舌にたいはくほど粗悪であった為、プロモーターは彼等に「アメリカへ行く」ことが唯一の希望だと話す。そして、彼等はマネージャーに連れられてアメリカへと旅立つ。

ニューヨークに着いて彼等は仕事を探したが、やっと見つかった仕事はメキシコでの結婚披露宴での演奏だった。彼等は巨大なキャデラックを購入し、一路メキシコを目指して出発する。ちなみにレニングラード・カウボーイズというバンドは実際にヨーロッパを中心に活動しており、映画と同じスタイルで演奏しているという。

## WORDS: 宇崎竜童 (ニューズウィーク日本版 1993.8.4号より)

— 三〇代や四〇代になったとき、そろそろロックなんかやめたらという声がかんこえてこなかったか

— スティーヴ・ヴァイの活動や作曲をやめても、ほかに食べる方法はあるかもしれない。ただ、それはほくとして少しも面白くない。

— 自分が面白くないのは、もう充分にやるほど、楽しんでこはなない。楽しいからこそ、努力もしている。

— 自分にとって、こんなに一生懸命努力できる職業はほかにない。

— ダウン・タウン当時と比べると、俺達組はかなり成熟した、野心的な音楽性のバンドだった。三〇を超えてから、日本のアスファルトの下にはどんな土が広がったんだろうというのを音楽的に考え出した。八〇年くらいから鬼太鼓座や文楽の人たちとジョイント・タウンでやっていた仕事をダウン・タウンでやりつづけた。そんな気分がふくらんで、俺達組をつづけたといえるかな。

— 若いころは何もかもやみくもに反抗できるけれど、年齢を重ねたときにはそれなりに間を開けるものがあると思う。今さら俺達もつづけていこうとは思っていない。

— あなたと同世代の人々は、最近の若者の音楽にはついていけないとよく口にする。

— そういっているのはおつさんかいよね。ビートルズを聴いて育った人が、今のビートルズを聴いて「わかんない」というのは、もう充分におつさんじゃないか。

— MTVなんか見てても、やっている人の年に関係なく好きなものは好きだと思える。たとえばガンズ・アンド・ローゼズなんかおついな、ついで思うもの。

— 五〇代や六〇代になったときの自分を、どう想像するか。わからない。一〇代の子たちは「宇崎? いいや何して何やってたよ」と思われたい。

— 別に義務感や使命感を背負ってやるわけではない。やりたからやるだけの話だ。ミック・ジャガーも、俺は俺なりにやる。若い子は若い子なりにやればいい。大人たちがセッティングしたものをなんの疑問もなくそのまま受け継がれるほうが怖い。



## LETTER: from 上柿彩

私か「ブルー・ハーツ」を好きなのは、今も「生きる力」を感じているから。涙が出る程心に響くから。もちろん「ブルー・ハーツ」に限らず他の音楽にも感じるものはありますが、「ブルー・ハーツ」は11年経って本気だ、私に感じる。心の目で「ブルー・ハーツ」をみることを気をつけてます。

上柿彩さんが、去年のマサシ追悼ライブでのブルー・ハーツのことを書いた58号(1992.11.28発行)と、岡田さんへの手紙という形で書いた69号(1993.6.25発行)に対する返事をくれた(その中の一語が上のコピーです)。

経済学者の内田義彦は「読書と社会科学」の中でこう書いている。「本を読む場合も、こういう解釈力が必要だともうんです。自分の眼が必ずしも信を置くに値しないこと、眼におおひがあって空を見逃しているかも知れぬことを、自分の眼そのものによって— 眼を自由に働かせて自分の心で— 気づく。信を貫きとおすことによって王/を見る自分の眼を深め、測らざるところに空を見出す。自分の眼を信ずることは大切で、それは何より大切ですが、自分の眼を盲信し自分の意見に流しやいけな。見得べきものが見えなくなる。」

マサシ追悼ライブでのブルー・ハーツが、そしていまのブルー・ハーツが心に響いてくるのだとしたら、それは上柿さんと私のきま方のちがいが、求め方のちがいがいとしかたない。上柿さんは上柿さんが「自分の信」を貫くことが大切で、私は私の「信を貫く。そして、上柿さんが「心の目でブルー・ハーツをみることに気をつけています」と書いてくれていること、すなわち「自分の眼を盲信し自分の意見に流しやいけな」ということをいつも心に留めておかなければいけないと思う。